

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 28 日現在

機関番号：32613

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2023

課題番号：17K02376

研究課題名（和文）雪どけ期の日ソ文化交流：ソ連の文化国家戦略と戦後日本の革新幻想

研究課題名（英文）Japanese-Soviet Cultural Exchange in the Thaw: The Soviet Union's Strategy for a Cultural State and Japan's Illusion of Progressive Intellectuals in the Postwar Era

研究代表者

梅津 紀雄 (UMETSU, NORIO)

工学院大学・教育推進機構・講師

研究者番号：20323462

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：1956年の日ソ共同宣言前後のいわゆる「雪どけ」の時期に、バレエやサーカス、クラシック音楽などのソ連のアーティストや団体が次々に来日し、一世を風靡した。これらは今日もなお、ロシアの有力な輸出コンテンツであり続けている（そしてまさにそれゆえに、ロシアのウクライナ侵攻に伴うキャンセル・カルチャーの影響を被った）。それらはアメリカとの文化的な冷戦のさなかに、ソ連を文化国家として権威付けるものだった。それらは結果として多くの人々をロシア文化や社会主義思想にひきつける結果となった。現在は社会主義思想との結びつきが失われた一方で、プーチン政権との結びつきが指摘されている。国家の支援に支えられているからだ。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日ソ共同宣言以前から、映画《シベリヤ物語》やシベリア抑留からの引揚者の影響もあり、うたごえ運動に見られるように、多くの人々がロシア・ソ連文化に惹きつけられていたが、雪どけ期にソ連文化の輸入が本格化すると、ポリショイ・バレエやポリショイ・サーカスのような「ドル箱」と称される団体が次々に来日し、さらに多くの人々を魅了した。これらの事実は、冷戦終結やソ連解体、プーチン政権に起因するロシア・イメージの悪化によって今日忘却されているが、日本の文化史の中に適切に位置づける必要がある。かつてトルストイやドストエフスキーらが日本の近代文学に大きな影響を与えたように、今日の日本にもその痕跡を残しているからだ。

研究成果の概要（英文）： During the so-called "thaw" period around the time of the Soviet-Japanese Joint Declaration of 1956, Soviet artists and groups such as ballet, circus, and classical music came to Japan one after another and took the country by storm. These are still Russia's dominant export content today (and thus suffered the effects of the cancel culture that accompanied Russia's invasion of Ukraine). They established the Soviet Union as a cultural state in the midst of a cultural Cold War with the United States. They resulted in the attraction of many people to Russian culture and socialist thought. Today, while the connection to socialist ideology has been lost, ties to Putin's regime have been noted. Since it is also supported by the state.

研究分野：日露文化交流史、表象文化論

キーワード：日本 ロシア ソ連 文化交流 雪どけ 音楽 プロレタリア文学 作家

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

冷戦のさなか、米ソ両国は軍拡競争や勢力争いに激しく火花を散らしながら、文化の領域においても競い合っていた。近年、文化冷戦として活発に研究されている分野である。作曲家ストラヴィンスキーが述べたように、米ソはともに「ピアニスト、オーケストラ、バレエなど」を輸出品としていた。共通の価値観で競い合っていたのである。冷戦自体がそうであるように、文化冷戦に関わっていたのも米ソ両国だけではなく、ヨーロッパの西ドイツと同様に、東アジアで冷戦の最前線に立たされた日本も、その争いのただ中であつた。スプートニク・ショックでロシア語熱が高揚した時代である。

戦後日本を親米国にするためにアメリカがソフトパワー（共感を得ることで味方につける手法）を駆使したことも研究が進んでいるが、他方でソ連の文化的影響力も高まっていた事実がある。いわゆる「うたごえ運動」ではロシア民謡やソ連の大衆歌曲が多く歌われた（「懐メロ」歌謡番組では歌われないが、今日も根強く日本で愛唱され続けている）。また、ポリショイ・バレエやポリショイ・サーカス、レニングラード（現代のサンクト・ペテルブルグ）・フィルハーモニー交響楽団は、近年まで定期的に来日し、日本の観衆・聴衆を沸かし続けてきたが、彼らの初来日は雪どけ期のことだった。この時期にロシア・ソ連の文化が集中的に日本に流入していたのである。

だが、こうした日ソの文化交流の実態は、まだほとんど研究対象となっていない。ポリショイ・バレエなどを次々と招聘した神彰の評伝『虚業成れり 「呼び屋」神彰の生涯』（大島幹雄著）や研究分担者・半谷史郎のいくつかの論文が挙げられるのみである。恐らくその理由は、社会主義体制の可能性が否定された現在において、少しでもソ連文化の価値を肯定的に記述することが敬遠されているからではなからうか。以上を背景に、本研究において当時の両国国内の状況を視野に入れながら、米国の存在を意識しつつ、こうした芸術文化の領域における日ソ交流の意義を明らかにしようと試みるに至った。

2. 研究の目的

本研究では、以上の背景を踏まえ、日ソ文化交流とソ連の文化国家戦略、および戦後日本の革新幻想との関係について、アメリカのソフトパワー戦略やソ連側にあった日本を中立化しようとする思惑との関係を意識しながら明らかにすることを目的とした。その際に念頭に置いたのは、以下の点である。

1) 占領期日本の親米化政策の実態と、ソ連の文化国家戦略

GHQの政策研究を参照軸としながら、階級・民族・性差の格差是正を志向したソ連が文化国家としての権威を追求していたことを明らかにするとともに、アメリカの姿勢との比較検討を行う。

2) 戦後日本の革新幻想、ソ連幻想（その背景としての《シベリア物語》）

「進歩的知識人」という言葉が象徴するように、知識人は進歩的、学生は左翼的なのが当然と見なされた時代が存在した。竹内洋『革新幻想の戦後史』を批判的に検討した上で、日本のソ連イメージを決定づけた映画《シベリア物語》の受容を、定期刊行物や回想を収集して検証する。

3) うたごえ運動の出発と発展、その余波

革新幻想のただ中で、「うたごえ運動」が起こり、その影響下にドン・コサック合唱団が来日公演を行い、ソ連の作曲家ショスタコーヴィチのオラトリオ《森の歌》が全国的ブームになる。定期刊行物や回想を収集して、当時の状況とソ連・ロシアのイメージを浮き彫りにする。

4) 日ソ文化交流の本格化と衝撃

国交回復と相前後して、オISTRAフ（1955）、ポリショイ・バレエ（1957）、レニングラード・フィルハーモニー交響楽団（1958）、ポリショイ・サーカス（1958）...とソ連のアーティストが次々と来日した。その衝撃を、アメリカ公演での反響やソ連での報道と比較しながら、明らかにする。

5) 日ソ交渉とソ連側の狙い

ソ連から見て、これらの公演の意義は一種のソフトパワー戦略だったと考えられる。日米離反を意図したとおぼしき、ソ連側の狙いを確認し、第6回世界青年平和友好祭（モスクワ大会）での日本人の活躍や、作家間・作曲家間の交流の背景と合わせて検討する。

3. 研究の方法

以上に述べたように、本研究は、雪どけ期、特に日ソ国交回復前後の日ソ文化交流の意義について、その（特にイデオロギー的な）背景を強く意識しながら検証することを目的とした。その際、既存の二次資料と公開されている一次史料を活用して行うこととした。他方、文化交流とその反響については、定期刊行物や回想などを収集・整理することを基本としつつ、当時を知る人々への聞き取りも実施して、活字からは掴めないような、当時の捉え方に肉薄していくことを掲げた。また、部分的にはアーカイヴ調査を実施して、さらなる史料の発掘を目指すこととした。

なお、「研究成果」の項で述べるように、新型コロナウイルスやロシアによるウクライナ侵攻

に伴い、実際にはあまり実現できなかったが、当初の構想を以下に掲げる。

平成 29 年度

初年度は、既存の一次史料と二次文献の収集・整理を徹底して行い、さらなる文献収集の準備を行う。

- 1) GHQ の占領政策についての分析。既存の二次文献を整理
- 2) 文化交流の始まり。オISTRAフの来日の背景と反響
- 3) うたごえ運動の始まり。中央合唱団の創設と関鑑子ら当時の指導部とロシア・ソ連との関わり、うたごえの歌本『青年歌集』におけるロシア・ソ連の比重の分析

年度後半にはロシア国立図書館やロシア国立公共歴史図書館などで定期刊行物などの文献収集を実施する。

平成 30 年度

- 1) 国交回復交渉前後のソ連の立場。日米離間の狙い
 - 2) うたごえ運動の高揚と関鑑子のスターリン平和賞（ノーベル平和賞に対抗して設置）受賞、その背景と日本での反響
 - 3) 作家・徳永直、岩上順一の訪ソ（第 2 回全ソ作家大会への参加）と彼らのソ連での評価
- 年度内に、ロシア国立公共歴史図書館やロシア国立文学芸術文書館などで調査を実施する。

平成 31 年度

- 1) オISTRAフ（1955）の（国交回復前の）来日と反響
 - 2) ドン・コサック合唱団の日本ツアーと反響、うたごえ運動との結びつき
 - 3) ショスタコーヴィチのオラトリオ《森の歌》のブームと、うたごえ運動、労音（勤労者音楽協議会）との関わり、ソ連のイメージ
 - 4) 第 6 回世界青年平和友好祭（1957）：日本人の活躍の実情についての分析
- 年度内に、ロシア国立図書館やロシア国立文学芸術文書館などで調査を実施する。

平成 32 年度

- 1) レニングラード・フィルハーモニー交響楽団（1958）の初来日と反響
 - 2) ポリショイ・サーカスの初来日（1958）とソ連での反響
 - 3) 石川達三と中野重治のソ連滞在
 - 4) 日本現代音楽協会とソ連作曲家同盟との交流。安部幸明と清瀬保二の訪ソ
- 年度内に、ロシア国立公共歴史図書館やロシア国立文学芸術文書館などで調査を実施する。

4. 研究成果

平成 29 年度は既存の一次史料と二次文献の収集・整理に重点を置いて研究を進めた。年度のはじめに研究代表者の梅津、研究分担者の吉田、半谷で打ち合わせを行った他、半谷が上京した際に随時補足の検討会を行った。

具体的には、まず戦後の日ソ文化交流の出発点となった、ソ連のヴァイオリニストオISTRAフの来日（1955、日ソ国交回復の前年）の背景と反響については、特に主催の『読売新聞』に詳細な報道があることを確認した。それらより、ソ連イメージの肯定的な側面の形成に大きな役割を果たしたことを想定することができた。

うたごえ運動の創設時のプロセスについては既存資料を消化して一定の認識を得た。占領期の状況については、山本武利『占領期メディア分析』（法政大学出版社、1996）や平野共余子『天皇と接吻 アメリカ占領下の日本映画検閲』（草思社、1998）、谷川建司『アメリカ映画と占領政策』（京都大学学術出版会、2002）などをはじめとした文献を検討した。

他方、聞き取り調査として、1957 年の平和友好祭の日本代表でもあるバレエ界の大御所、薄井憲二氏に対するインタビューを予定していたが、直前にご逝去されたため、これは果たせなかった。しかし、その準備の途上で、日本のバレエ導入の歴史においてロシア・ソ連の果たした役割について改めて認識し、文化交流史として読解できることを改めて理解することができた。ロシアでの史料調査は、代表者の梅津と研究分担者の半谷が試行し、主としてゴスコンツェルト（ソ連国立コンサート組織）の文書を閲覧し、文書のスタイルや傾向について一定の認識を得た。本格的な調査をもう一度年度内に実施する予定であったが、日程の都合で果たせなかった。

平成 30 年度は前年度の成果に基づき、まずダヴィード・オISTRAフの来日の前後の状況について、日本側の資料に加えて、ソ連側の資料の収集と検討を行った。そのうえで、まずは新聞など定期刊行物掲載の記事を軸とした日本側の資料を整理し、「ダヴィード・オISTRAフの初来日：芸術大国ソ連の発見」と題して、論文にまとめた。それを通じて、オISTRAフ来日公演の成功が、日ソのいずれにも大きなインパクトを与えたのは揺るぎない事実であること、そしてそれがその後の文化交流の土台をなしたということを確認するに至った。

ロシアでの史料調査は、上述のオISTRAフ関連のものも含めて、代表者の梅津が実施し、全ソ対外文化交流協会（VOKS）、ゴスコンツェルト（ソ連国立コンサート組織）、国際スターリン／レーニン平和賞（関鑑子、および安井郁関連、また比較対象としてレーニン賞関連）、第 3 回友好スポーツ大会、そして作家徳永直・岩上順一の訪ソの記録について、ロシア国立文学芸術文書

館(RGALI)、およびロシア連邦文書館(GARF)において調査を行った。

また、関連調査として、1957年のモスクワ平和友好祭の参加者である小川義男氏(学校法人狭山ヶ丘学園校長)および田中雄三氏(龍谷大学名誉教授)、ロシア音楽研究の大家である森田稔氏(宮城教育大学名誉教授)そして第3回友好スポーツ大会(レスリング・フリースタイル、バンタム級)の参加者で優勝者である石澤二郎氏に聞き取りを行った。

平成31年(令和元年)度は、前年度までの成果に基づき、まず第3回友好スポーツ大会についての情報整理を進め、共同研究者の半谷史郎とともに、論文作成を行った。インタビュー対象者の石澤二郎氏提供の史料も活用しての論稿である。

また、前年度の資料調査の成果である、訪ソした日本の作家の懇談記録の翻訳を進めた。原文に誤植が多く、解読に時間を要したが(速記録を起こした担当者が日本語や日本文学についての知識がなかったと推測される)、共同研究者の吉田司雄とともに公開の準備を進めた。ソ連で日本文学にどのような関心が抱かれていたが鮮明にすることが可能となり、また同時代の日本の状況を考える上でも有益な史料と考えてのことである。

他方、年度末の2020年3月にロシア連邦モスクワ市の、ロシア国立図書館やロシア国立文学・芸術文書館などでの資料調査や、日本国内でのインタビュー調査を予定していたが、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、渡航直前に中止を余儀なくされた。

令和2年(2020年)度は前年度と同様に新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受け、ロシア連邦モスクワ市でのアーカイヴ調査を実行できなかった。また新たなインタビュー調査も見送りを余儀なくされた(対象者の高齢化も原因に含まれる)。また授業のオンライン化に伴う対応のために相当の労力を要したため、研究遂行に割ける時間が激減した。このため、既存の収集資料の整理、および国内資料の新たな調査とそれらの公開に向けての検討が軸となった。まず1958年の第3回友好スポーツ大会についての論文を改めて検討し直し、公開準備を進めた。また、一昨年度の資料調査の成果である、訪ソした日本の作家の懇談記録の翻訳をほぼ終えて、周辺資料を参照しながら、共同研究者の吉田司雄とともに公開の準備を進めた。以上のように、全体的に研究遂行が遅延しているため、研究期間の延長を申請した(最終的には令和5(2023)年度まで延長することとなった)。

令和3年(2021年)度は、前年度と同様に感染症の影響などで、ロシア連邦モスクワ市でのアーカイヴ調査を実行できなかった。また新たなインタビュー調査もほぼ不可能だった(対象者の高齢化が原因の一つ)。また対面授業が一定程度復活したが、ハイフレックス化した授業も多く、それらの対応のために相当の労力を要し、結果として研究遂行に当てる時間はあまり得られなかった。このため、昨年度同様に既存の収集資料の整理、および国内資料の新たな調査とそれらの公開に向けての検討を軸とせざるを得なかった。

ただ前年度までの成果に基づいた1958年の第3回友好スポーツ大会についての論文はようやく公開することができた。また共同研究者の半谷史郎の尽力で1957年及び59年に訪ソした長瀬隆氏に聞き取りを行うことができた。

年度末には現地調査の可能性を探っていたが、2月24日にロシア軍がウクライナ侵攻を開始したことで、計画遂行が困難になった。他方で侵攻に伴ってウクライナ文化が脚光を浴び、ロシア文化に対するいわゆる「キャンセルカルチャー」と呼ばれる事態が合わせて生じたため、一定程度は研究者としても情勢を注視することに時間を割くことになった。本研究課題と直接は無関係と思われたが、ソ連時代とプーチン政権との文化政策の、連続性と断絶が問題になるため、本研究を遂行する上でも新たな視点が得る結果となった。すなわち、現代のロシアの芸術文化が公的援助に多くを依拠し、国家と一定の関係を有し続けていることを顕にしたからだ。その一端をSRC緊急セミナー「ウクライナ情勢：文化面での反応」で明らかにした。

令和3年(2021年)度もウクライナ侵攻の影響を被ったが、前年度にSRC緊急セミナーで報告した内容を増補し、『チェマダン特別号2022』に拙稿を掲載した。また年度末には米国プリンストン大学のサイモン・モリソン教授の来日を機に、慶應義塾大学の越野剛准教授との共催で、ソ連などの社会主義国と音楽劇との関係を再考する試みとして「Symposium with Prof. Simon Morrison's Special Lecture: Music Theater Under Socialism」を開催した。報告者に加納遥香、齋藤慶子、山下正美、及び討論者に村山久美子、中田朱美の各氏の参加を得て、雪どけ期の文化交流も含めた議論を行った。

また研究分担者である愛知県立大学の半谷史郎教授との間では、関係研究課題である1957年のモスクワ友好祭についてのWebページ制作の作業を進め、当研究課題への一定の刺激となった。半谷はまた関連業績として、ポリオ生ワクチンの緊急輸入についての論文を発表した。

令和5(2023)年度には、懸案であった、徳永直と岩上順一が1954年末から55年にかけてソ連に渡航した際の作家同盟での議事録の翻訳を、研究分担者の吉田司雄の協力を得て公開することができた。また、滞っていた現地調査を2024年3月に実施することができた。2019年春を最後に、当初は新型コロナウイルス、その後はロシア・ウクライナ戦争の影響で、控えていたものである。今回はロシア国立文学芸術文書館(RGALI)での調査が主で、ソ連文化省や作家同盟の文書を開覧した。これらは本来2020年3月に実施する予定であった。一定の展望は得られたとは

いえ、ごく短期間であったことと、年度末の実施であったことから、具体的な研究成果を得るには至っていない。ロシアに関しては、2022年3月7日以降、外務省が危険レベル3（渡航中止勧告）を発出した状態が今日も続いており、やはり外務省が記すように（現金の持ち込みなど）「経済制裁措置の影響に留意した準備が必要不可欠」ではあるが、渡航や現地調査は可能であることを確認できたことは大きい。

研究期間全体としては、やはり新型コロナウイルス、続くロシアによるウクライナ侵攻の影響が大きく、期間延長を行っても当初の計画通りに研究を遂行することは果たせなかった。とはいえ、雪どけ期の日ソ文化交流について、一定の文書が残されており、研究の余地があり、少なくともそのディテールにおいては、従来の様々な記述や一般的なイメージを刷新できる可能性があることを確認できたと考える。その前後の時期と比較して、相対的に社会主義国ソ連に一定の期待が寄せられていた時期の日ソ文化交流の記述は容易ではないが、イメージや先入観ではなく、事実に基づいた記述に努めていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計16件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 9件）

1. 著者名 梅津, 紀雄、吉田, 司雄	4. 巻 61-2
2. 論文標題 ソ連作家同盟外国委員会での日本文学界についての徳永直・岩上順一との懇談記録	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 工学院大学研究論叢	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.57377/0002000331	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 梅津紀雄	4. 巻 68
2. 論文標題 ロシア音楽の帝国性を考える：グリムカとポロディンを中心に	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 ユーラシア研究	6. 最初と最後の頁 103-108
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 梅津紀雄	4. 巻 特別号
2. 論文標題 ウクライナ戦争とロシアのクラシック音楽界の現在：二重の踏み絵は新たな鉄のカーテンか	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 チェマダン特別号ーウクライナ侵攻とロシアの現在	6. 最初と最後の頁 54-80
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 半谷 史郎	4. 巻 109
2. 論文標題 1961年のソ連製ポリオ生ワクチンの緊急輸入	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ロシア史研究	6. 最初と最後の頁 59-78
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 梅津紀雄, 半谷史郎	4. 巻 59
2. 論文標題 第3回国際青年友好スポーツ大会にみる雪解け期の日ソ・スポーツ交流 : あるレスリング選手のソ連体験	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 工学院大学研究論叢	6. 最初と最後の頁 81-98
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 梅津紀雄	4. 巻 62
2. 論文標題 ナイジェル・クリフ(松村哲哉訳)『ホワイトハウスのピアニスト ヴァン・クライバーンと冷戦』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ユーラシア研究	6. 最初と最後の頁 69-70
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 半谷史郎	4. 巻 54
2. 論文標題 バレエ評論家・薄井憲二のソ連体験:シベリア抑留とモスクワ平和友好祭の思い出(下)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 愛知県立大学外国語学部紀要(地域研究:国際学編)	6. 最初と最後の頁 249-273
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15088/00004837	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 半谷史郎	4. 巻 52
2. 論文標題 バレエ評論家・薄井憲二のソ連体験:シベリア抑留とモスクワ平和友好祭の思い出(中)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 愛知県立大学外国語学部紀要(地域研究:国際学編)	6. 最初と最後の頁 277-301
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15088/00003811	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 梅津紀雄	4. 巻 56-2
2. 論文標題 ダヴィード・オイストラフの初来日：芸術大国ソ連の発見	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 工学院大学研究論叢	6. 最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 半谷史郎	4. 巻 51
2. 論文標題 パレエ評論家・薄井憲二のソ連体験：シベリア抑留とモスクワ平和友好祭の思い出(上)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 愛知県立大学外国語学部紀要(地域研究：国際学編)	6. 最初と最後の頁 277-301
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 梅津紀雄・半谷史郎	4. 巻 32
2. 論文標題 「邦楽4人の会」の誕生：オーラル・ヒストリーの中のモスクワ青年学生平和友好祭(1957)	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Slavistika	6. 最初と最後の頁 191-212
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 半谷史郎	4. 巻 19
2. 論文標題 1957年モスクワ平和友好祭：ある日本人参加者の思い出(下)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 愛知県立大学大学院国際文化研究科論集	6. 最初と最後の頁 267-288
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15088/00003449	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 梅津紀雄
2. 発表標題 レオニード・クロイツァー：帝政ロシア出身のユダヤ系音楽家と日本
3. 学会等名 日露交流史研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Norio UMETSU
2. 発表標題 The Opera in the Soviet Music and the Cultural Control in Practice: The Rehabilitation of Lady Macbeth of the Mtsensk
3. 学会等名 Symposium with Prof. Simon Morrison's Special Lecture: Music Theater Under Socialism (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 梅津紀雄
2. 発表標題 ウクライナ情勢：文化面での反応：音楽
3. 学会等名 SRC 緊急セミナー「ウクライナ情勢：文化面での反応」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 半谷史郎
2. 発表標題 日本人のソ連観の長期変動：時事世論調査と学習雑誌の記事を中心に
3. 学会等名 「昭和のロシア」研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 梅津紀雄
2. 発表標題 20 世紀前半の前衛音楽における楽音
3. 学会等名 日本ロシア文学会全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 梅津紀雄
2. 発表標題 文化的覇権と文化的プレゼンス：ソ連から見た文化冷戦
3. 学会等名 日本音楽学会東日本支部：シンポジウム「冷戦時代の音楽を考える」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 梅津紀雄
2. 発表標題 芸術音楽から見たソ連：雪どけ期のショスタコーヴィチを中心に
3. 学会等名 ミニ・シンポジウム「ファシズム、共産主義と音楽」（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 梅津紀雄
2. 発表標題 ロシア音楽はまだゲッター化されているか：「政治と音楽」の議論をめぐって
3. 学会等名 科研費研究会「20世紀ロシア音楽再考：社会主義経験の意義を問いなおすために」平成29年度第1回研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 梅津紀雄
2. 発表標題 スヴァトスラフ・リヒテル、初来日の経緯について
3. 学会等名 科研費研究会「20世紀ロシア音楽再考：社会主義経験の意義を問いなおすために」平成29年度第1回研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 梅津紀雄
2. 発表標題 近年の文献にみる「ブラウダ批判」と芸術界の反応
3. 学会等名 科研費研究会「20世紀ロシア音楽再考：社会主義経験の意義を問いなおすために」平成29年度第2回研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Morio Yoshida
2. 発表標題 One representation of 19th century Australia: Fergus Hume and Japanese
3. 学会等名 オーストラリア日本学会（JASS）2017年度大会（国際学会）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計9件

1. 著者名 沼野充義、沼野恭子、平松潤奈、乗松亨平	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 306
3. 書名 ロシア文化 55のキーワード	

1. 著者名 長塚英雄(責任編集)、河野雅治、沢田和彦、倉田有佳、稲葉千晴、瀧藤厚、大木昭男、ポダルコ・ピョートル、セルゲイ・クズネツォフ、藤本和貴夫、梅津紀雄ほか	4. 発行年 2019年
2. 出版社 生活ジャーナル	5. 総ページ数 487
3. 書名 続々・日露異色の群像30 文化・相互理解に尽くした人々	

1. 著者名 沼野充義、望月哲男、池田嘉郎(編集代表)、梅津紀雄、半谷史郎ほか	4. 発行年 2019年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 886
3. 書名 ロシア文化事典	

1. 著者名 ソロモン・ヴォルコフ著、亀山 郁夫、梅津 紀雄、前田 和泉、古川 哲訳	4. 発行年 2018年
2. 出版社 慶應義塾大学出版会	5. 総ページ数 560
3. 書名 シヨスタコーヴィチとスターリン	

1. 著者名 中村唯史、大平陽一、三浦清美、奈倉有里、武田昭文、梅津紀雄	4. 発行年 2018年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 288
3. 書名 自叙の迷宮	

1. 著者名 松戸清裕、浅岡善治	4. 発行年 2017年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 336
3. 書名 ロシア革命とソ連の世紀 4	

1. 著者名 長塚英雄責任編集	4. 発行年 2017年
2. 出版社 生活ジャーナル	5. 総ページ数 531
3. 書名 続・日露異色の群像30 文化・相互理解に尽くした人々	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	吉田 司雄 (Yoshida Morio) (50296779)	工学院大学・教育推進機構(公私立大学の部局等)・教授 (32613)	
研究分担者	半谷 史郎 (Hanya Shiro) (90731406)	愛知県立大学・外国語学部・教授 (23901)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 Symposium with Prof. Simon Morrison's Special Lecture: Music Theater Under Socialism	開催年 2023年～2023年
--	--------------------

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------